No. 8 1958, VI-15

日本菌学会会報

日本菌学会発行（事務局：東京都台東区上野公園，国立科学博物館内）

TRANSACTIONS OF THE MYCOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Published by the Mycological Society of Japan
Office: National Science Museum, Ueno Park, Tokyo, Japan

目　次

Contents

煤病菌の生態と分類（その1）

山本和太郎

Wataro YAMAMOTO: Ecology and classification of sooty moulds

植物の葉の表面に繁殖する煤色の黴をすべて煤病菌と呼んでいる。この菌名は他の菌名にくらべて甚だあいまいてある。たとえば，ウドンコ菌，サビ菌，クロホ菌と云えば，どの科に属するか，また形態や寄生性がどのようであるかは良くわかつている。しかるに，煤病菌は特定の科のものと限定されていないから，様々な科たとえば Capnodiaceae, Meliolaceae, Asterinaceae, Parodiellinaceae, Dematiaceae, Sphaerioidaceae，その他に属する広範囲の菌群が含まれ，その形態は多種多様，寄生性も純寄生から純腐生に至る甚だ複雑な菌である。本文はこの複雑な煤病菌を採集し，調べようとする方々の手引きになるようにと，まとめられたものである。

煤病菌の寄生性と寄主範囲

煤病菌はいずれも生活している葉上で繁殖しているが，ウドンコ菌のように葉の生活組織から養分を吸収して純寄生する種類と葉上に付着した吸汁性昆虫の分泌液を養分として純腐生する種類がある。煤病菌を研究する場合に，先ず両者を明確に区別しておく必要がある。

従来報告された Capnodiaceae と Perisporiaceae の科と属の特徴には寄生性が明確にされていないから，これらの科と属にはいずれも寄生種と腐生種とがまざつている。たとえば寄生菌の属に腐生種が混じ，反対に腐生菌の属に寄生種が混じている場合がある。煤病菌の分類上の複雑さは，従来寄生種と腐生種を区別しないで分類されたからである。

A. **煤病菌の寄生性**　これは Meliolaceae (Perisporiaceae と Capnodiaceae とのうち寄生性のもの), Asterinaceae (Microthyriaceae のうち表生菌絲を有するもの), Parodiellinaceae などに属する種類であ

る。これらのうち，Meliolaceae の種類は表生菌絲に2細胞からなる頭状附属枝（capitate hyphopodia）をそなえ，Asterinaceae の種類は表生菌絲に通常単細胞，時には2細胞の附属枝（hyphopodia）をそなえ，これらの附属枝はいずれも葉の表皮に密着している。これらの下側から接種菌絲が出て，これが表皮を貫通し，表皮細胞，時には表皮細胞を貫通して下側の細胞内に吸器を形成して養分を吸収する。

Parodiellinaceae の種類は表生菌絲に前記のような附属枝を欠き，不定形の附属枝状物（stomopodia）をそなえ，これが気孔上に密着して下側から接種菌絲が出る。これが気孔を通つて内部に侵入し，細胞間隙を迷走し，そのまま又は細胞内に吸器を形成して養分を吸収する。これらをウドンコ菌科と比較すると，前者は Erysipheae 亜科の寄生方法，後者は Phyllactinieae 亜科の寄生方法に似ている。

寄生性の煤病菌はウドンコ菌のように寄主植物が限定されている。各科の種類のうち，主として筆者の報告した数種について寄主植物を次に示す。

Meliolaceae

Amazonia peregrina タイワンセンリョウ
Armatella hitseae シロダモ，コバノシロダモ，ニイタカシロダモ，ヤブニッケイ
Balladyna velutina クチナシ，タイワンクチナシ
Irene calostroma イチゴの数種
Meliola Butleri カンキツの数種
Meliola Osmanthi ヒイラギ，ナガバモクセイ
Meliola sakawensis クサギ，ヤエザキクサギ，リュウセンクワ

Astrinaceae

Asterina Aucubae アオキ
Asterina Sponiae ウラジロエノキ
Asterolibertia hiiranensis ヒメウラジロエノキ
Cirsosiella nodulosa ミズトウヅル
Lembosia tikusiensis ハチク
Lembosia Ormosiae ベニマメノキ
Morenoella Linderae ナンバンクロモジ

Parodiellinaceae

Meliolina octospora アデク，タイワンアデク

このように，これら寄生種は通常同一属の1種または数種の植物を寄主とし，稀れに近縁な他の属の種類を寄主植物とする場合がある。しかし近縁でない他の種類には寄主範囲が及ばない。

これら寄生種は暖地に多く発生し，筆者は台湾でMeliolaceae のものを 113 種，Asterinaceae のものを 42 種，Parodiellinaceae のものを1種採集した。日本の暖地でも多く発生していると思われるが，未調査であつて，多く報告されていない。既に報告された種類も検討してみる必要があるように思われる。

B. 煤病菌の腐生性 この菌は葉上に繁殖するが，その葉から養分を吸収していない。葉上に付着したアブラムシ，カイガラムシ，コナジラミなどの分泌液を吸収して生活している。したがつて，葉のみでなく，分泌液の付着した枝幹，果実，地面，時には木材や石などの表面にも良く繁殖していることがある。これは純腐生菌であるが，自然状態では分泌液以外の他の有機物の上には繁殖しないようである。また分泌液は栄養が豊富であるから，煤病菌の外に様々な腐生性の雑菌も繁殖し，複雑な混生様相を呈している場合がある。この腐生性のものは Capnodiaceae，Dematiaceae，Sphaerioidaceae などに属する。この Dematiaceae と Sphaerioidaceae のものは煤病菌か雑菌か区別できない場合がある。

これら煤病菌の寄主範囲（真の寄主範囲ではなく，見かけ上の寄主範囲）は寄生性のものと全く相違し，すこぶる広範囲である。この寄主範囲について筆者が台湾で調べた数種のものについて次に示す。

Phaeosaccardinula javanica 29科40属の48種
Neocapnodium Tanakae 18科29属の48種
Triposporiopsis spinigera 17科28属の38種
Scorias communis 10科16属の21種
Aithaloderma clavatosporum 11科12属の18種
Chaetothyrium echinulatum 8科8属の9種
Hypocapnodium setosum 6科6属の9種
Chaetoscorias vulgare 6科7属の7種

このように，見かけ上の寄主植物が数種ないし数十種であるが，これら種類は多くの科と多くの属にまたがり，種類間に類縁関係が認められない。分泌液が付着した植物に煤病菌が伝播すれば，いずれの植物もすべて寄主植物となり得るから，腐生性の煤病菌の同定には発生した植物の種名は役立たない。従来の報告では，この腐生種が寄生種と混同され，様々な植物に発生した同種の菌が，その植物の相違によつてそれぞれ別種のものとされているもるがある。またカンキツ，チャ，ツバキ，クワ，カキ，カシ，カラマツのみにそれぞれ発生する固有の煤病菌が報告されているが，これら煤病菌はそれら植物のみに発生する固有のものとは考えられない。

煤病菌の伝播

寄生性の煤病菌はウドンコ菌のように風によつて伝播されるが，腐生性のものは風の外に，分泌液を訪れるアリ，ハエ，ハチなどの昆虫によつて伝播される。腐生性のものの伝播について次に詳しく記す。

A. **風媒による伝播** 分生胞子を無数に形成する *Cladosporium*, *Hormodendrum*, *Curvularia*, *Brachysporium*, *Alternaria*, *Macrosporium* など Dematiaceae に属する種類は，この伝播で発生し易い。Capnodiaceae の種類は風で伝播され難い。

植物葉上に分泌液が付着した時に，気候や地域の関係でアリ，ハエ，ハチなどが訪れない場合，前記 Dematiaceae 時には Sphaerioidaceae の胞子が風によつて伝播され，分泌液上に煤病菌叢を形成する。このような煤病菌はウンカ，ヨコバイ，アブラムシなどに伴つて発生する1年生の農作物または落葉果樹の煤病菌に見られる。

たとえば，ウンカやヨコバイに伴つてイネに発生する煤病菌，アブラムシに伴つて発生するキュウリ，ナス，トマト，カボチヤ，ダイズ，アズキ，ダイコン，トウモロコシなどの煤病菌，またウメ，モモ，アンズなどに発生する煤病菌，なおクワ，クリ，カキなどの落葉樹に最初発生する煤病菌などは通常風媒で発生し，Dematiaceae の種類からなつているものが多い。

（つずく）

Exobasidium の2新種について

伊藤誠哉・大谷吉雄

Seiya Ito and Yoshio Ōtani: Two new species of *Exobasidium*.

伊藤誠哉著：日本菌類誌第II巻4号に，モチビョウ菌属 Exobasidium に属する2新種をのせたが，正式の発表形式をととのえなかつたので，ここに改めて記載発表する。

In this paper, the writers describe the following two new species of *Exobasidium*, *E. empetri* and *E. nudum*. These were proposed in "Mycological Flora of Japan", published by the senior writer in 1955, but, as there were given no Latin diagnoses, the writers redescribe them in legitimate form, as follows.

1. **Exobasidium empetri** S. Ito et Ōtani, sp. nov.

S. Ito, Myc. Fl. Jap. 2 (4): 47, f. 30 (1955), nom. seminud.

Primo epidermide tectum, dein rumpens sed hymenio leviter distinguente, foliis infectis plus minus bullatis, luteis; basidiis clavatis, brevibus, saepe ventricosis, 20～28×8.5 μ, 2～4 sterigmatibus; sporis ellipsoideis vel ovoideis, hyalinis, laevibus, 8.5～14.0×5.5～9.5 μ, basi minutissime apiculatis, continuis dein 1-septatis.

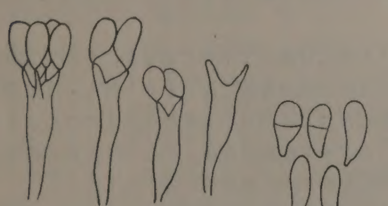


Fig. 1. *Exobasidium empetri* S. Ito et Ōtani
a. basidia b. spores

Hab. in foliis *Empetri nigri* var. *japonici* in monte Tosso, South Saghalien (July 30, 1928, N. Hiratsuka-Typus) et in monte Yubari, Hokkaido, Japonia (June 26, 1956, Y. Ōtani).

Jap. name: Gankōran-habukuremochibyōkin.

2. **Exobasidium nudum** (Shirai) S. Ito et Ōtani, comb. nov.

S. Ito, l.c. 2 (4): 48, f. 32 (1955) nom. seminud.

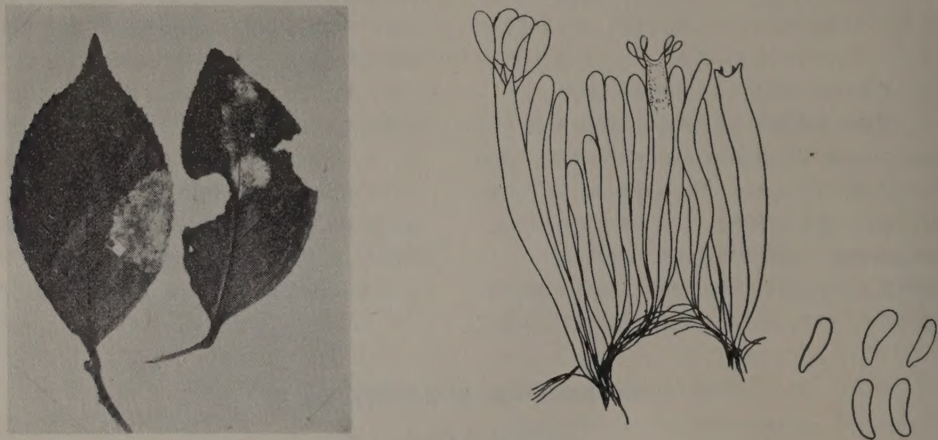
Exobasidium camelliae Shirai var. *nudo* Shirai, Nōgyōkoku 5: 23 (1911) nom. seminud.

Exobasidium sp. Hemmi, Ann. Phytopath. Soc. Jap. 2: 293 (1930)

Receptaculo in foliis vel ramulis junioribus, maculis orbiculatis vel irregularibus, 1～4 cm latis, supra plus minus concavis infra plus minus convexis, circa peripheriam luteis vel luteorubris; hymenio albo-pruinoso; basidiis clavatis, longis, 100×7.5 μ, 4-sterigmatibus; sporis oblongo-obovatis, hyalinis, laevibus, 8.5～17.0×4.5～7.0 μ, continuis, dein 1～3 septatis.

Hab. in foliis vel ramulis junioribus *Camelliae japonicae.*

Distrib. Honshū, Shikoku, Kyūshū, Japonia.
Jap. name: Tsubaki-Konamochibyōkin.



a b c

Fig. 2. *Exobasidium nudum* (SHIRAI) S. ITO et OTANI
a. infected leaves b. basidia c. spores

探 蕈 録 (その 1)

伊 藤 誠 哉

Seiya ITO: Miscellaneous notes on mushrooms (1)

病気静養中聊か閑を得て少しく雑文を書いてみる気分になつた。さて筆をとつてみると，手持ちの参考書は誠に寥々たるものであり，さりとて図書館通いはこの雪のなかとうてい不可能である。従つて記事の不完全なところが多くなることを免れない。もし読者の補正を得ることが出来れば幸これに過ぐるものはない。

(1) 書紀にあるキノコ

わが国の国史のうちで今日現存する最も古いものは元明天皇の和銅 2 年（西暦 709 年）太朝臣安万侶の撰進した［古事記］3 巻で，“天地初発之時，於高天原成神名‥‥”に始まり第 34 代推古天皇までの記録である。全巻を通じ皇室の系譜を中心として書かれており，一応通覧したところではキノコに関する記事は見当らない。

これに次いで古いものは［日本書紀］であろう。天武天皇第 3 皇子舎人親王が安万侶等の協力を得て撰ばれた 30 巻，神代から第 41 代持統天皇までの記録で元正天皇の養老 4 年（西暦 720 年）に出来たもので，その内にキノコに関する記事は少くとも 3 ケ所にある。

その一は巻第 10，誉田天皇（ホムタノスメラミコト）応神天皇（第 15 代）の部にある。今ここに原文の通りに転載することは，聊か煩にわたるようだが，それが真面目な忠実な親切な方法であろうかと次にそれを記した。

19 年冬 10 月戊戌朔幸吉野宮時国樔人来朝之因以醴酒献于天皇而歌曰‥‥夫国樔其為人甚淳朴也毎取山菓食亦煮蝦蟆為上味名曰毛瀰其土自京東南之隔山而居吉野河上峯嶮谷深道路狭巘故雖不遠於京本希朝来然自此之後屢参赴以献土毛其土毛者栗菌及年魚之類焉

以上の漢文は極めて平易であるが，それでも昭和の若い人々には或は難解であるかもしれん。殊に漢文を横書きにされては返り点も振り仮名もつけることが出来ず，ますます難解となる。それでは折角の親切心もむだになるので次に意訳的に書き流した。

“19 年（西暦 288 年）冬 10 月つちのえいぬの 1 日，吉野の宮に幸したもう。時に国樔人（クスヒト，国栖とも書き日本先住民族の一種という）来朝し，濃き酒を天皇に献じて歌つて曰く‥‥かのクスはその

人となり甚だすなおなり。つねに山の果実をとりて食し，また蛙を煮て上等の食物とし，名づけてモミという。その土地は京より東南の方，山を隔てて吉野河のほとりにあり，峯嶮にして谷深く，道路狭くさかし，故に京に遠からずと雖，もとより来朝することまれなりき。然しこれより後，しばしば参り来り以て土毛（クニツモノ，土地の産物）をたてまつる。そのクニツモノは栗菌（クリタケ）及び年魚（アユ）の類なり。”

これによつて本邦の古文書（こもんじよ）にある最初の軟いキノコはクリタケであるということになる。その後本邦の各本草物産書——といつても自分の手もとにあるもの——で貝原益軒著大和本草（西暦 1709）以外殆どすべてのものにクリタケの名がのつて居る。即ち松岡玄達著：怡顔斎菌品（1761）[No. 13]，曽占春著：皇和菌譜（1791）[No. 17]，市岡知寛著：信陽菌譜（1799）[No. 61]，増島蘭畹著：菌史（1811）[No. 91, 92, 198]，岩崎常正著：本草図譜（1828）巻 55 [14, 15, 16 T] 等にあり，尚栗モタセの名は坂本浩然著：菌譜（1834）[No. 50]，栗本瑞見著：仙台菌譜 [No. 21] 等にある。しかしこれ等諸書中のクリタケ或はクリモタセがすべて同一菌であるか，或は今日われ等のいうクリタケと同じものであるや否やは別問題である。只ここにはクリタケが甚だ普通に用いられた名であることを示したにすぎない。

日本書紀にある第二の記事は巻第 24 天豊財重日足姫天皇（アメトヨタカライカシヒタラシヒメノスメラミコト）皇極天皇（第35代）3年（644）の部にある。

倭国言頃者菟田郡人押坂直将一童子欣遊雪上登菟田山便見紫菌挺雪而生高六寸余満四町許乃使童子採取還示隣家総言不知且疑毒物於是押坂直与童子煮而食之大有気味明日往見都不在焉押坂直与童子因喫菌羮無病而寿或人云蓋俗不知芝草而妄言菌耶

“大和の国言上す，この頃菟田（ウタ）郡の人，押坂の直〔アタエ，上古の姓（カバネ），族制政治の世に家筋を表わした一種の称号で，何々の臣（オミ），何々の連（ムラジ）という類〕一童子をひきいて雪の上に欣び遊び，菟田山に登り，すなわち紫の菌，雪よりぬきんでて生いたるを見る，高さ 6 寸余，4町許りに満つ，すなわち童子をして採取せしめ，還つて隣家に示す，皆言う，知らずと，且つ毒物なりと疑う，ここに於て押坂の直は童子と共に煮て食う，大に気味あり，明日ゆきて見るに，すべてなし，押坂の直は童子と菌のあつものを食せしによつて病なくして長寿す，或人のいう，けだし俗，芝草ということを知らずして，みだりに菌と言えるか。”

この記事によれば雪をかぶつた紫のキノコが翌日行つてみれば全部無くなつたとあるのは，まだよいとしても，4町ばかりに満つとは少々大袈裟ではあるまいか。その最後にこれを食して長寿を保つたという点から芝草であろうと結んである。芝草とは霊芝（マンネンタケ）のことであり，従つてこれが硬いキノコの代表者霊芝の日本に於ける最も古いレコードであることとなる。

霊芝は支那でも日本でも一般大衆に熟知されたもので，甚だ多くの名称をもつている。増島氏，岩崎氏等の著書から摘記すれば次の如くである。

レイシタケ，マンネンタケ［伊勢］，サイワイタケ［京畿］，キチジョウサウ（吉祥草）［伊勢］，カドデタケ（首途菌）［丹波］，ヤマノカミノシャクシ［紀伊］，マゴシャクシ［奥州，水戸］，ネコノシャクシ［関東］，玉来［続日本紀］——芝［本経］，霊芝［本経原始］，三秀［楚辞］，椴脱［斉民要術］，祥芝［李義府］，科名草［群芳譜，清異録］，瑤草［江淹詩］，菌蠢［群芳譜］，紫達［通雅］等々，更に芝を分ち五芝或は六芝と称し，赤芝，青芝，黄芝，白芝，黒芝，紫芝を記している。

今ここで本草書空前絶後の大著で，出版後まもなく日本に渡来し著しく本邦文化に貢献した［本草綱目］を披見してみよう。本書は明の李時珍が［証類本草］をもととし，諸家の書 710 余部を参照し，薬物 1892 種を載せ，神宗の万暦 18 年（わが天正 18 年［1590］）に出版した 52 巻の本である。その 28 巻，菜之五，芝栭類 15 種の初めに「芝」が載つている。それを全部ここに転写するような愚鈍なことはせぬが，ただその釈名の部の内で此頃活字にもないと思われる数個の文字を省いて次に記してみる。

［時珍曰］芝本作之篆文象草生地上之形後人借之字為語辞遂加草以別之也爾雅云〇芝也註云一歳三華瑞草或曰生於剛処曰菌生於柔処曰芝昔四皓采芝群仙服食則芝亦菌属可食者故移入菜部

“［時珍曰う］‘芝’の字はもと‘之’と書いた。篆書で草が地上に生じた形にかたどつたものである（‘之’の字の古字は‘山’の中心のたて棒を下に伸ばし，その下に一を引いたもの㞢），後の人，‘之’の字を借りて語としたが遂にこれに草かんむりを付けて，これを区別した。爾雅に〇（草冠りに囚）は‘芝’であるとし，註に 1 年に三度花さく瑞草という，或人の曰うには，硬い処に生ずるものを菌といい，柔かい処に生ずるを芝と曰うと。昔四皓は芝を採

り，群仙は服食するとせば，芝もまた菌の属で食うべき者である。それ故に移して菜の部に入れた。"

これらの記事は別に説明を要しないが，四皓については聊か解説をした方がよかろうか。四皓というのは秦の始皇帝の時，乱を避けて商山という陝西県の東にある山に隠れた学者，東園公，綺里季，夏黄公，角里先生（コクリ，活字の都合で角里とある本もあるが角字のつのの1本足りない字がほんとうらしい）の4人でいずれも鬚も眉も白かつたので商山の四皓という。漢の世になつて高祖が度々招聘したが応じないで，芝を食つておつたという。その時四皓は次の如き歌を作つたとの事である。

皓天嗟嗟，深谷逶迤，樹木莫莫，高山崔嵬，穴居巌処，以為幄菌，曄曄紫芝，可以療饑，唐虞往矣，吾当安帰

"皓天（ひので，あきらかなる天）嗟嗟（嘆く声，ああ），深谷逶迤（イイ，連りならぶ，ななめに行くかたち），樹木莫莫（バクバク，密に茂るかたち），高山崔嵬（サイクワイ，高くて大なるかたち），巌処に穴居し，以て幄茵（アクイン，とばり，しとね）となし，曄曄（イウイウ，光りて艶あるかたち）たる紫芝，以て饑を療すべし，唐虞往（ゆく）けり，われまさに安にか（いずくにか）帰らん。"

但し四皓は饑えて死んだのではない。高祖が寵愛した戚夫人が趙王如意を生んだので盈太子を廃そうとした。太子の実母呂后がこれは大変だと張良に相談して，四皓を招いて太子に侍せしめた。驚いたのは高祖で，何故われに従わずに太子に侍するかと問うたら，四皓は陛下は士を軽んずるが，太子は能く士を愛すると聞いたからであると答えた。それで高祖は我意を飜して太子を廃さなかつたというので目出度し，目出度しで話が終つている。かの伯夷叔齊の兄弟が自国殷の国を平げた周の武王に従わず，周の粟をはまずと首陽山に隠れ，薇を採つて食つたが遂に餓死した話は誰でも知つて居るのに反し，餓死しなかつた四皓の事は比較的知る人が少いように思われるので，キノコ食いの大先輩としてここに宣伝したわけである。但し李時珍が四皓や仙人が服食するとすれば芝は食うべき者であるから之を菜の部に移すと述べて居るところからすれば霊芝は決して普通に食用としては居らぬことが伺われるのである。然るに日本では皇極天皇の3年に押坂の直が煮て羹として食したのは多分霊芝であろうとし，且つ大に気味ありと悦んだというのは興味ある事であり，昭和の今日，今関氏がサルノコシカケ類のヤニタケ（*Ischnoderma resinosum* (Fr.) Karst.）を食して大に気味ありなどと悦に入つて居らるる顔が彷彿として目に浮ぶのである（本誌6号参照）。

現今本邦産マンネンタケ類の研究は今関氏によつて精しく行われ，科学博物館報告第1号（1931）に発表され，その後更に研鑚の結果マンネンタケ族（Ganodermeae）にマンネンタケ属（*Ganoderma*）9種，コマタケ属（*Amauroderma*）2種，エビタケ属（*Trachyderma*）1種，コフキタケ属（*Elfvingia*）1種のあることが知られている。これ等の各属各種は無茎有茎の別があつても，外見上相類似して居るので以前にはマンネンタケの名の下に取りあつかわれたものであろうと考えられる。

日本書紀にある第3の記事もまた芝草である。巻第29，天渟中原瀛真人天皇（アマノヌナハラオキノマヒトノスメラミコト）天武天皇（第40代）8年（680）の部に次の記事がある。

是年紀伊国伊刀郡貢芝草其状似菌茎長尺其蓋二囲亦因幡国貢瑞稲毎茎有枝

"この年紀伊の国伊刀（イト）の郡，芝草をみつぎす，そのかたちタケに似，茎の長さ尺，その蓋（カサ）二囲（ふたかかい），亦因幡の国瑞稲を貢す，茎ごとに枝あり。"

嘗つて白井光太郎博士は其著，植物妖異考に瑞稲の記事を載せられたので，この多枝の稲に就ては比較的早く知ることが出来た。この紀伊国より献上した芝草即ち霊芝には茎の長さは尺，その傘の周囲が二た囲あつたと，その性状を記してあるが，果してそんな霊芝があるであろうかとの疑問が浮ぶであろう。手もとにある資料では唐の代宗の大暦8年（わが光仁天皇宝亀4年［773］）廬州盧江県に紫芝生ず，高さ1丈5尺と書いてあるのが最高記録である。しかしこれは却つて李白の秋浦の歌にある白髪三千丈の名句を想起せしむるのみである。前記今関氏の調査によればマンネンタケの一種マゴジャクシ（*Ganoderma neo-japonicum* Imaz.）の茎長は27 cmに及んでいるので，若し茎長尺とあるその尺が曲尺であつたとすれば，それ位の長さに達することもあるであろう。次に手の長くない私は一囲150 cm位であるから，二囲の円盤であれば直径100 cm内外となるであろう。従来霊芝類の記録で傘の甚だ大形といわれるニセカンバタケ（*G. colossum* (Fr.) Bose）では横径48 cmコフキタケ（*Elfvingia applanata* (Pers.) Karst.）の横径は50 cmとあるが，後者はこれより大きいものもあるように思われる。但しこの両菌ともに無茎で半円形の傘をもつ種類であるので，若し茎を持ち二囲の傘を戴く霊芝が

あつたとすれば珍中の珍であろう。

サルノコシカケ類の子実体の大さに就て考えると，先づ想起するのは LLOYD 氏の Mycological writing, III の Polyporoid issue, No. 3 (Aug. 1910) にある Two Mammoth Polyporoids の記事である。これによると *Polyporus talpae* は周囲 230 cm, 横径 70 cm, 重さ 9.1-2 kg で，*Fomes pachxphloeus* は横径 150 cm, 重さ $20\frac{1}{4}$ kg とあつて，その附図に菌を押して居る滑稽な爺さんが尺度代りに描かれてある。但しこの両菌もまた無茎のものであるが，後菌は周囲二囲以上であろう。

北海道で最も大きい傘を有するものはニレサルノコシカケ (*Rigidoporus ulmarius* (FR.) IMAZ.) であろう。永年北大植物教室に巨大さを誇つて居た標品は，敗戦接収の間にその姿を失つて一抹の悲哀を感じていたところ，今関氏が空知郡山部の東大演習林で巨大な本菌の標品を得られた。その標品は横径 135 cm あるとのことで，これから半円形の周囲を計算すれば 347 cm に及び，二囲以上になる。その写真は今関，本郷両氏の原色日本菌類図鑑第 66 図版 387-8 図にのせてある。そこに尺度の役目をして居る右の人物は大谷吉雄氏で痩軀鶴の如くであるが，左の人物は青島清雄氏で中肩中肉，程のよい，尺度として最適の好漢である。

日本書紀に続く国史は [続日本紀] (ショクニホンギと読む) で 42 代文武天皇即位元年から 50 代桓武天皇延暦 10 年迄 95 年間の記録で 40 巻よりなり (前半は藤原継縄等，後半は菅野真道等が撰修) 延暦 16 年 (797) に出来たもので，その巻 9，天璽国押開豊桜彦天皇 (アメシルシクニオシハラキトヨサクラヒコノスメラミコト) 聖武天皇 (45 代) の神亀 3 年 9 月 (726) の部に次の如き記事がある。

庚寅内裏生玉来勅令朝野道俗等作玉来詩賦壬寅文人一百十二人上玉来詩賦随其等第賜禄有差

"かのえとら，内裏に玉来 (来の字は本によつて異なり棄，苿，菜，或は活字にないような字もある) を生ず，勅して朝野の道俗等をして玉来の詩賦を作らしむ，みずのえのとら，文人一百十二人，玉来の詩賦をたてまつる，その等級 (第) にしたがつて禄を賜うに差あり。"

次にその 1 等より 5 等までの賞品が書いてある。元来支那ではマンネンタケ即ち霊芝を非常に目出度いものとし，神農経にも山川雲雨，四時五行，陰陽昼夜の精，以て五色の神芝を生ず，聖王の休祥 (よき幸福，瑞祥) となすなどと記し，北宋の真宗の景徳年間 (1004～1007) には勅を出して芝を献上せしめて十余万本に及び，或は北宋徽宗の政和年間 (1111～1117) に郡守李文仲が 30 万本とつたといい，又室内に不意に梁や柱に生ずるので極めて珍しい瑞祥としたといい，天宝の初め即ち唐の玄宗 (742) に臨川郡の人李嘉胤なる者の住宅の柱上に霊芝が出たので太守張景倹がその柱を抜いて献上したとか，唐の太宗 (627-) の寝室の内に芝 14 茎を生じたとか随分多くの例が書かれている。殊に有名なのは元封 2 年 (前漢武帝) 夏 6 月，甘泉宮中に芝を産したとて，後漢の儒者班固が詠じた芝房の歌があることである。

斎房産草　九茎連葉　宮童効異　披図案牒　元気之精　回復此都　蔓蔓日茂　芝成霊華

"斎房 (ととのつた室) 草を産し，九茎葉を連ね，宮童異をいたし，図を披き牒 (史編) を案ず，元気の精，此の都 (長安) を回復し，蔓々日に茂く，芝霊華を成す。"

前記聖武天皇の時，内裏に玉来即ち霊芝が生じ詩を奉らしめたとあるが，その時の詩は見当らない。然しここで一転して考えると住宅，しかも宮殿の柱から霊芝がニヨキ，ニヨキ出て来たとは驚かざるを得ない。よほど乾燥不充分な材木か，或はジメジメした湿潤な室でなければ，あり得ないだろうし，瑞祥などとは，どうも考えられない。この点に就ては已に本草綱目に李時珍も指摘して居る。即ち "時珍嘗つて疑う，芝は乃ち腐朽余気の生ずるところ，正に人の瘤贅を生ずるが如し，而して古今皆以て瑞草となし，又た服食して仙すべしと云う，誠に迂謬なりとなす，近頃成式が言を読みて始めて知る，先づ我言わんと欲するところを得て，其の撥一なり，又た方士，木を以て湿処に積み薬を用いて之れをたすくれば即ち五色の芝を生ず，嘉靖中，王金嘗つて生ぜしめ，以て世宗 (明，1522) に献ず，これ昔人の未だ言わざる所の者なり，知らずんばある可らず" と明記して居る。更に一層痛快なのは曽占春の皇和蕈譜 (1791) 吉祥蕈 (No. 31) の記事である。即ち "この本草は無毒と謂うと雖，必ずしも人間の食うべきものに非らず，若し夫れ嬰童孩児の游具となすは則ち然り，然れども漢人毎々仙家道人の怪誕，之を瑞物となすを主張し，或は芝草の図を作り，或は五芝経を作り，縷々数言を費す，本草の時珍既に迂謬を言い，尚六芝の目を立て，言行相そむく，大労鏤版又何ぞ之を益せん，此方 (日本) も亦復た其の謬りを受け，名を瑞祥の義を以てし，猶且つ勢州地方或は之を正月辛盤 (五辛盤の略で，元日にネギ，ニラ，ニンニク，タデ，カラシをまぜて食い新年を迎う)

に備え，以て歳首の慶を賀す，諺に云う，鰮(イワシ)の頭も禱りに応ずも亦た是の類のみ，又別に石芝あり，これ石乳結成し，其形芝に似たり，或は云う，仙之れを服すと，何ぞ其の妄なる，仙又た人か，人あに石を食わんや" と,文中にある石芝はイワタケ (*Gyrophora esculenta* MIYOSHI，地衣の一種）で，うまいとは云い難いが汁の実として食するものであるが，それは別として鋭い筆鋒当るべからざるものがあるではないか。

（2） 物語にあるキノコ

若い頃有名な古い物語の類を随分多く乱読したが，その内にキノコの話があつたか否か，一向に記憶がない。平安朝恋愛中心のなまめかしい，いといみじう哀れな物語には，キノコの話があつたとしても，決して多くはあるまいと勝手な解釈をつけ，今これ等の文献を探ることをやめにする，然し説話文学の先駆をなした今昔物語や宇治拾遺物語になると直ちにキノコの話が見えることは興味深い。

［今昔物語］ 今昔物語は宇治大納言物語の別名で，各説話の書き初めに，いづれも「今は昔」という文句があるから今昔物語の名を以ても呼ばれたという。宇治拾遺物語の序文によると西宮左大臣高明の孫である俊賢大納言の第二子，源隆国（1004～1077）の作で，老人になつて暑さを避けて，5月から8月迄，宇治の平等院の一切経蔵の南の山際の南泉房という所に籠つて居つたので宇治大納言と呼ばれて居つた。髻（もとどり）を分けて結び，おかしげな姿して，板の上に莚をしいて涼んで居り，大きな団扇であおがせながら，往来を通る高い人，卑しい人の別なく，呼び集めて昔話しをさせ，自身は寝ころんでその話を書き取つたものであるから極めて種々雑多の内容を含んでいる。この物語りに漏れたものを拾いあつめて宇治拾遺物語りが出来た。しかし侍従のことを拾遺と云うから宇治拾遺物語りといつたのか判明しないと書いてある。この記事に就いて異説を唱える人も多く，出来上つた年代もよく判らない。源隆国は承暦元年（1077）に病気になつて出家し，間もなく没した。年74歳とあるから，大体平安朝の末期に作られたろうといわれている。この本に載つて居る尼さんが茸を食つて舞うた話は現今のキノコの著述に時々転載されており，人の知つて居るところであるから，以上比較的詳細にこの本の出来た経歴を記したわけである。

今昔物語の巻28にキノコに関する話が四つある。

左大臣の御読経所の僧茸に酔いて死する語。第17

金峯山の別当毒茸を食いて酔わざる語。第18

比叡山の横川の僧茸に酔いて誦経する語。第19

尼共山に入り茸を食うて舞う語。第28

これ等の記事を全部転載するかどうかに就いて考えてみた結果，誠に煩わしく又余りに愚劣であるとのそしりを免れぬとは思うものの，折角かち得た機会に出来るだけ全部を一ケ所に集録しておくことがお互に便利であるとの結論に達した。微意の存するところを諒せられたい。

○左大臣の御読経所の僧茸に酔いて死する語。

"今は昔，御堂の左大臣（藤原道長）と申して枇杷殿に住ませ給いける時に，御読経勤めける僧ありけり，名をば□となん云いける。□の僧なり。枇杷殿の南にありける小屋を房として居たりけるに秋比(ごろ)童子の童（わらべ）有りて，小一条の森に有りける藤の木に平茸多く生えたりけるを，師に取り持ち来て「かかる物なむ見付けたる」と云いければ師「いと吉（よ）き物持ち来たり」と喜びて，たちまち汁物に為させて，弟子の僧童子と3人さし合いて(より集つて)吉く食いてけり。其の後暫しあつて3人ながら俄に頸を立てて病み迷う。物を突き（嘔吐すること）堪えがたく迷い転びて，師と童子の童（わらべ）とは死にぬ。弟子の僧は死ぬ許り病みて落居て（おちいて，落ちついて）死なずなりぬ。

即ち其の由を左大臣聞かせ給いて，哀れがり歎かせ給うこと限りなし。貧しかりつる僧なれば何が（いかが）すらんと押し量（はか）らせ給いて，葬りの料に絹布米など多く給いたりければ，外にある弟子童子など多く来り集まりて，車に乗せて葬りけり。

而る間東大寺に有る□と云う僧，同じく御読経に候いけるに，それも殿の辺（あたり）近き所に果て（はて）し僧と同じ房に宿したりけるに，其の同宿の僧の見えければ，□弟子の下法師を呼びて私語（ささやき）きて物へ遣りつ（やりつ，使にやつた)。要事ありて物へ遣るにこそは有らめと見る程に，即ち下法師返り来ぬめり。袖に物を入れて袖を覆いて隠して持ち来たり，置くを見れば平茸を一袖（袖いつぱい）に入れて持ち来るなり。此の僧「これは何ぞ(なにぞ)の平茸にか有らむ，近来かく奇異し（あやし）き事有るころ，いかなる平茸にかあらむ」と怖ろしく見居たるに，暫許（とばかり）有りて焼漬し（やきひたし）にして持ち来ぬ。□飯にも合わせで，只此の平茸の限りを皆食いつ。同宿の僧此れを見て，「此は何ぞの平茸を俄に食うぞ」と問えば□が云わく「これは□が食いて死にたる平茸を取りに遣わして食うなり」と。同宿の僧「此はいかにし給う事ぞ，物に狂い

給うか」と云えば「□欲しく侍れば」。答えて，何とも思いたらで（思わずに）食うを同宿の僧制し敢うべくもあらぬ程なれば，かく見置くままに急ぎて殿に参りて「亦極じき（いみじき）事出で詣で（もうで）来候いなんとす，然々（しかじか）の事なむ候」と申さすれば殿これを聞かせ給いて「奇異（あやし）き事かな」など仰せ給う程に，□御読経の時継ぐ（読経の後をつづける）とて参りぬ。殿「何に思いてかかる平茸をば食いけるぞ」と問わせ給えば□が申さく，「□が葬料を給わりて，恥を見給えず成りぬるが羨ましく候なり，□も死に候いなむに，大路にこそは棄てられ候わめ，然れば□も茸を食いて死に候いなば□が様に葬料給わり候いぬべかめりと思い給いて食い候いつるなり。それに死なず成り候いぬれば」と申しければ殿「物に狂う僧かな」と仰せ給いてなむ咲わせ（笑わせ）給いける。

然れば早う極じき（いみじき）毒茸を食えども酔わぬ（中毒せぬ）事にて有りけるをば，人を愕（おびやか）さんとてかく云い居るなりけり。其のころは此の事をなむ世に語りて咲い（笑い）ける。然れば茸を食いて酔いて急に死ぬる人も有り，またかく死なぬ人も有れば，定めて（確かめて）食う様の有るにこそ有らめなむ，語り伝えるとや。”

以上は貧僧の詐欺取財未遂事件で先づ戒告ぐらいですむだろうが，キノコの立場からみれば少くとも二つの課題がある，即ち第一には初めの死んだ僧の食つたキノコは平茸なりや否や，第二には後の僧はキノコの毒に不感受性であるか否かということである。第一の問題は簡単に判定できるだろう。ヒラタケ（*Pleurotus ostreatus* (FR.) QUÉL.）は何人も知るように極めて普通に春から秋おそくまで枯れた広葉樹の幹に多数層々相かさなつて出て，どこでも良好の食用菌として利用して居り，昔から人工栽培もされている。その生育状態の類似の点からムキタケ（*Hohenbuehelia serotina* (FR.) SING.）カンタケ（*Pleurotus spodoleucus* (FR.) QUÉL.）シイタケ（*Lentinus edodes* (BERK.) SING.）等と混同され，殊にこまつたことには毒性の強いツキヨタケ（*Lampteromyces japonicus* (KAWAM.) SING.）と誤られることである。古い記録にヒラタケを食つて死んだとあるのは，たとえ証拠物件がないにしても，ツキヨタケの誤食と認定してもよかろうと思われる。

ツキヨタケは夜光を発するので人の注意をひき徳川時代の物産誌にはその名が見える。例えば日光菌譜（1766）[No. 4]，坂本菌譜（1834）[No. 56]，仙台菌譜 [No. 95] などにあるが図や説明等は甚だ感心出来ない。即ち日光菌譜には“津幾予タケ，又ドクタケ，夏月に生ず，夜陰に至りて光を発す”との説明はよいが，図には長い茎のものを描き，坂本菌譜には“月夜蕈ツキヨタケ，螢火芝（牡丹譜），形状大占地に似て8月多く生ず，若し人誤て占地として食う時は必ず吐瀉腹痛，甚しきに至れば死す，此の菌夜光を発す，故に月夜蕈と云う，又早助蕈とも云う，昔早助なる者あり，之を食して立所に死す。予，野州採薬の帰途友人櫟斎阿部喜任と同く此菌を得て家に帰り酒徹に出す，食するもの皆吐瀉腹痛，因て樺皮を煎じ服して癒ゆ，後又此菌を得て土人に問う，曰く是れ月夜蕈と云う，毒あり食せず，若し之を食えば死すと云う，多く平野茅草或は朽木横倒の者に生ず，択ばずんばあるべからず”と，これに二箇体を描いてあるがその図はどうもツキヨタケのようには思われない。仙台菌譜には“月夜タケ，紫蕈一名紫富蕈，菌譜にも図せり，ムラサキシメジ備前山形の宮山に生ず，土人之を食す，毒なし”とあるが何を指すかわからない。

現今一般にキノコの知識が進みヒラタケと誤つてこれを食う者は寥々たるものであろう。ツキヨタケは最も普通にブナの木に生じ，カエデ類にもつき，また北海道ではトドマツにも生ずる。貝原益軒は已に其著大和本草（1709）に於てヒラタケ（蘑菰）は“ブナの木に生ずるは寒月にあらざれば毒あり”と記し，シイタケは“ブナの木に生ずる者形状は同じけれども毒あり，或は人を殺す，食う可からず，今世或は生椎耳（なましいたけ）を食して死する者あり，其の故を知る者なし，けだしブナの木に生ずるを食するか，択ぶ可し，木耳（きくらげ）など木によりて其性の良毒あるが如し”と記しておる。多分このブナの木の毒菌はツキヨタケであつて，已にブナの木を指摘して居るところは敬服の至りである。

前記の死んだ僧は確かにツキヨタケの誤食と思われるが，それがブナの木でなく藤の木に生じてたとある点は不可解である。茸の生えるような藤の木は北海道には見られないし，また小坊主の誤りとも判断できない。

第二の問題は後の僧が毒菌に感じないからの狂言としてあることである。茸の中毒現象に就いては今関及本郷両氏の著にも書いてあるから，玆に記することを要しない。但しこの僧のように中毒せぬ全くの不感受性の人があるだろうか。同時に同一条件で毒菌を食つても感ずる程度が違うことを見ると，或はこの特異性もあるかもしれん。これは将来の研究問題の一つでな

かろうか。

○金峯山の別当毒茸を食いて酔わざる語。

"今は昔，金峯山（きんぷ山は大和国吉野郡にあり，蔵王権現をまつる，金の御嶽ともいうという）の別当にありける老僧ありけり。古は金峯山の別当は彼の山の一﨟（いちろうは年功をつんだ長である）をなむ用いける，近う成りて然は無きなりけり。それに年来一﨟なる老僧別当にてありけるに次の﨟なる僧ありて，此の別当早う死ねかし。われ別当にならむと懃（ねんごろに，切にの意）に思いけれども，強々(つよづよ)として，死に気(け)もなかりければ，此の二﨟の僧思いわびて思い得る様，此の別当が年は八十に余りぬれども，身すこやかに七十に無く強々としてあるに，我も既に七十に成りぬ，若し我別当にも成らで前に死ぬる事もぞある。然れば此の別当を打殺させむも聞え現（あらわ）なりぬべれば，只毒を食わせて殺してむと思う心付きぬ。

三宝（仏法僧）の思食さむ（おぼしめさむ）事も怖しけれども，然りとては何が（いかが）わせむと思いて，其の毒を思い廻らすに，人の必ず死ぬことは茸の中に和太利（わたり）と云う茸こそ，人それを食いつれば酔いて必ず死にぬれ。これを取りて艶わず（えもいわず）調美して（甘く料理して）「平茸ぞ」と云いて，此の別当に食わせてば必ず死なんとす。然て我別当に成らむと謀りて，秋ごろなりければ，自ら人も具せずして山に行きて多く和太利を取り持ち来にけり。生夕暮（なま夕暮はやや日の暮れるころ）方に房に帰りて，人にも見せずして皆鍋に切り入れつ，煎物に艶わず（えもいわず）調美してけり。

然て夜明けて未だ朝（つとめて）別当の許に人を遣りて（やりて）「急と（きと，早く）おわせ」と云わせたれば，別当程もなく杖を突きて出で来たり。房主（ぼうず）指向ひて居て云わく「昨日人の微妙じき(いみじき）平茸をたまいたりしを，煎物にして食わせむとし申し候いつるなり，年老いては此様の美き（うまき）物欲しく侍るなり」など語らえば別当喜びて打ちうなづきて居たるに，糒（ひ，稲を火にあぶりて穀をとつたもの，焼米）をして此の和太利の煎物を温めて汁物にて食わせたれば別当いと吉く（うまく）食いつ，房主は例の平茸を別に構えて（かまえて，調味して）ぞ食いける，既に食いはてて湯など飲みつれば，房主今はし得つと（もう甘くしおうせたと）思いて，今や物突き（嘔吐）迷い頭を痛がり狂うと心もとなく見居たるに，すべて其の気色もなければ極じく(いみじく）怪しと思う程に，別当歯もなき口を少し頬笑みて云わく「年来此の法師は（自分は）未だ此く微妙じく（いみじく）調味されたる和太利をこそ食い候わぬなりぬれ」と打云いて居たれば，房主然は知りたりけるなりと思うに，奇異し（あやし）と云えば愚かなりや。恥かしくて更に物も否（え）云わずして房主入りぬれば，別当も房へ返りにけり。

早う此の別当は年来和太利を役と（やくと，つとめ）食いけれども，酔わざりける僧にて有りけるを知らで構え（たくらみ）たりける事の支度（したく）相違いて止みにけり。然れば毒茸を食えども，露酔わぬ人の有りけるなりけり。此の事は其の山に有りける僧の語りけるを聞き伝えてかく語り伝えたるとや。"

以上は悪質の殺人未遂事件である。これをキノコの立場からすれば別当は菌毒不感受性であるか，またワタリという菌はどんなキノコかという問題になる。それで手もとにある物産書を探つてみるとワタリの名は怡顔斎菌品（1761）[No. 47]，皇和蕈譜（1791）[No. 83]，菌史（1811）[No. 174] などに出ている。その第一書には"天台山に生ず，大さ松蕈の如し，隔年に生ずと云う"とあり，第二書にも"山城天台山中之れを生ず，略松蕈に類す，隔年して生ず，味稍々佳"とあつて前者とほぼ同一であるが，味やや佳とあるのが気にかかる。第三書には"菌品，大さ松菌の如く天台山に生ず"とかき，これに今昔物語の前掲の記事の要旨を摘記して"然則外打里亦有不傷人者，宇治拾遺亦言外打里毒殺人，其形色則未聞"とあるが最後にある宇治拾遺の記事は私には見当らなかつた。何れにしても是等の筆者もその形や色も不明であり，有毒か否やも不確実のように見える。本邦キノコ分類の恩人川村清一氏の著「日本菌類図説」（1930）[No. 166] のツキヨダケの部にその異名としてクマヒラ，クマベラ，ワタリ，ブナノカタハ，ヒカリゴケ（北陸地方）の5名を載せられたが多分地方に通用していた名称から決定されたものであろう。これによつて前掲の二﨟の僧の集めてきた茸はツキヨダケでなく，ヒラタケか，それに類似する無毒のキノコであつて，死なぬのは当然であることとなるであろう。多くの場合は平茸と誤つてツキヨダケを食うのであるが，これはそれと反対にツキヨダケと誤つて平茸のような無毒菌を馳走したことになり，菌毒不感受性の問題でもなんでもないことになるわけである。

○比叡山の横川の僧茸に酔いて誦経する語。

"今は昔，比叡山の横川（よかわ）に住みける僧ありけり。秋ごろ房の法師山に行きて木伐り（きこり）けるに，平茸の有りけるを取りて持ち来たりけり。僧共

これを見て「これは平茸にはあらず」など云う人もありけれども，亦人ありて「これは正しき平茸なり」と云いければ，汁物にして栢（かや）の油のありけるを入れて，房主吉く食いけり。其の後暫許（とばかり）ありて，頭をたてて病む（やむ）。物を突き（嘔吐）迷うこと限りなし。術（すべ）なくて法服を取り出でて，横川の中堂に誦経に行きぬ。

而るに □ と云う僧を以て導師として申し上げさす。導師祈り持ち行きて畢てに（はてに，終りに）教化（きようげ）に云わく「一乗の峯（比叡山をいう）には住み給えども，六根（眼，耳，鼻，舌，身）五内（肝，心，脾，肺，腎）の□の位を習い給わざりければ，舌の所に耳を用いる間（舌根の慾の為めに耳を傾ける）身の病と成り給うなりけり。鷲の山（天竺の霊鷲山，釈迦の説法をした山）におわしましあわむをりを尋ねつつも登り給いなまし。知らぬ茸と思すべらに（思す可き，思うだろうに）独り迷い給うなりけり，廻向（えこう）大菩提」と云いければ，次第とりたる僧共腹筋を切りてぞ咲い嘲り（笑いののしり）ける。僧は死ぬ許り迷いて落居（おちついた）けりとなむ，語り伝えたるとや。”

以上の話も亦平茸の問題で，もはや私にはいうべき事はない。むしろ導師の教化に興味がある。茸に中毒して苦しんでいる最中に“舌の根に慾を起し，耳を傾けて食うからこそ苦しむのだ”そんな事は知らぬダケだとは少々手きびしい。今日でも未知のキノコを極めて大胆に，全く無茶苦茶に貪り食う人がないではないし，比較的最近に有名な雑誌にこの導師に教化を願わねばならぬ程の名論が出て居るということである。いずれにしても有毒菌の種類数は比較的少数のものであるから之れを確知するようにつとむべきであり，命の安売りはすべきでないと思う。

○尼共山に入り茸を食うて舞う語。

“今は昔，京にある木伐人共，数（あまた）北山に行きたりけるに，道を踏み違えて何方（いずく）へ行くべしとも思えざりければ 4，5 人ばかり山の中に居て歎きける程に，山奥の方より人数（あまた）来ければ，怪しく何者の来るにか有らんと思いける程に，尼君共の 4，5 人許り極じく（いみじく）舞い乙でて（かなでて）出で来りければ，木伐人共これを見て恐ち（おぢ）怖れて，此の尼共のかく舞い乙でて（かなでて）来るは，定めてよも人にはあらじ，天狗にや有らむ亦鬼神にや有らむとなむ思いて見居たるに，此の舞う尼共此の木伐共を見付けて只寄りに寄り来れば，木伐共極じく怖わしとは思いながら，尼共の寄り来たるに，此は何なる（いかなる）尼君達のかくは舞い乙(かな)でて，深き山の奥よりは出で給いたるぞと問いければ，尼共の云わく「己等がかくは舞い乙でて来てば，其（そこ）達定めて恐れ思うらむ，但し我等は其々（そこそこ）にある尼共なり，花を摘みて仏に奉らむと思いて，朋（とも）ないて入りたりつるが，道を踏み違えて出ずべき様も思わずありつる程に，茸の有りつるを見付けて，物の欲しき儘にこれを取りて食いたらむ，酔いやせむずらむとは思いながら饑えて死なむよりは去来（いざ）これ取りて食わむと思いて，それを取りて焼きて食いつるに極じく甘かりつれば賢き（かしこき）事なりと思いつるより，只かく心ならず舞わるるなり。心にもいと怪しきことかなとは思えども，いと怪しくなむ」と云うに，木伐共これを聞きて奇異しく（あやしく）思うこと限りなし。

然て木伐共も極じく物の欲しかりければ尼共食い残して取りて多く持ちける其の茸を死なむよりは去来（いざ）此の茸乞いて食わむと思いて，乞いて食いける後より，亦木伐人共も心ならず舞われけり。然れば尼共も木伐人共に互に舞いつづけて咲い（笑い）ける。然て暫く有りければ酔いの悟め（さめ）たるが如くして道も思わで各々返りにけり。それより後此の茸をば舞茸と云うなりけり。

これを思うに極めて怪しきことなり。近来も其の舞茸有れどもこれを食う人必ず舞わず。これ極めて不審しきことなりとなむ，語り伝えたるとや。”

以上の文は面白い話であるので，前記の如く時々キノコの書に転載されている。この記事の終りにこの茸を舞茸というが近頃の舞茸を食つても踊らないのは不可解だとあるが，全く別のキノコであるからで，何にもいぶかしい事はない。踊る茸はワライタケ（*Panaeolus papilionaceus*（FR.）QUÉL.），オオワライタケ（*Gymnopilus spectabilis*（FR.）A.H. SMITH）或はシビレタケ(＝ワライタケモドキ) *Psilocybe venenata*（IMAI）IMAZ. et HONGO）の類であつて，マイタケ（*Grifola frondosa*（DICKS. ex FR.）S. F. GRAY）及びチョレイマイタケ（*G. umbellata*（PERS. ex FR. PILÁT），シロマイタケ（*G. albicans* IMAZ.），トンビマイタケ（*G. gigantea*（PERS. ex FR.）PILÁT），ミヤマトンビマイタケ（*Bondarzewia montana*（QUÉL.）Sing.）の類とは何等の類縁もないキノコである。

ワライタケ類の中毒は他の毒茸の如く消化器，呼吸器，循環器系統などに異変を起さずに，神経系統に作用して酩酊状態となし，幻惑を起したり，歌つたり踊るとのことである。ワライタケの名は怡顔斎菌品

(1761) [No. 60], 皇和蕈譜 (1791) [No. 114], 菌史 (1811) [No. 165] 等にあるけれど特に此処に引用する程の記事でないようだ。

今日のマイタケはナラの大木の根もとに生える大きな多孔菌で人のよく知つている美味な菌である。貝原益軒大和本草を始めとし，古い物産書のすべてに載つている。皇和蕈譜 (1791) [No. 88] には其の状宛も雞冠花様に似て而して翩々頗る乱舞の容をなすと記し，マイタケの名の出所を暗示して居り，坂本菌譜 (1834) [No. 30] には宛として舞人の形の如し，熊この菌を見て而して能く舞い好んで是を食う，故に名づくと書いてある。ここで想起するのは今関氏の昭和30年10月6～8日，NHK 第1，趣味の手帖の時間に於ける「キノコ漫談」の放送である。この放送を誠に興味深く感じたのは決して私独りではないであろう。殊にこの放送を 31 年1月，樹影第9号 (p. 32～42) に「キノコ随談」として印刷にされ，その別刷の寄贈に接し感謝措く能わざるところであつた。その第二日中毒についての談話の内にワライタケのことを述べられ，マイタケに言及され “よいシロつまり巣を見つけると一度に十貫目もとれることがあるので，そのあり場所は親兄弟にも知らさないという位，これを見つけた人は嬉しくてワクワクする所から舞茸とよばれるようになつたらしい” と述べられている。

[宇治拾遺物語] 前の今昔物語の条に書いたようにこの物語も筆者や年代等に異説があるが，鎌倉時代初期のものであろうといわれている。その内に茸に関するものは只次の章だけである。

“〇丹波国篠村に平茸生うる事 (巻第 1，[2])

是れも今は昔，丹波国篠村という所に年比平茸やるかたもなく多かりけり。里村の者是れを取りて，人にもこころざし，又我れも食いなどして年比過ぐる程に其里にとりて主 (むね) と有る者の夢に，頭小攝み (おずみ) たる法師ども 2，30 人ばかり出で来て「申すべき事」と云いければ「如何なる人ぞ」と問うに「此法師ばらは，此年比も宮仕いよくして候いつるが，此里の縁尽きて，今は他所へ罷り候いなんずることの，且は哀に，もし又事の申さではと思いて，此由を申すなり」と云うを見て，打醒きて (おどろきて) 「此は何事ぞ」と，妻や子やなどに語る程に，又其里の人の夢にも，此の定 (じょう) に見えたりとて，数多同じ様に語れば，心も得で年も暮れぬ。さて次の年の9，10月にも成りぬるに，さきざき出で来る程なれば，山に入りて茸を求むるに，総て菌 (くさびら) 大方見えず。如何なる事にかと，里国の者思いて過ぐる程に，故仲胤僧都とて，説法並びなき人いましけり。此事を聞きて「是は如何に，不浄説法する法師，平茸に生ると云う事の有るものを」とのたまいてけり。されば如何にも如何にも平茸は食わざらんに事欠くまじきものとぞ。”

以上の話はキノコの豊凶の問題であるのかもしれん。キノコに豊凶の差があることは確かであるが学術的に調査されたものを見ないので何ともいいようがない。更に不浄説法する法師が平茸になるというに至つては，また何をかいわんやである。その最後に平茸を食わんでもよいではないかとあるのは全く仏教の消極的な禁慾思想のあらわれであろう。

ここで与謝の蕪村の「宇治行」の一節を転載して，この宇治の物語の結末とすることとする。

〇宇治行 (天明3年，蕪村文集)

“宇治山の南，田原の山深く，茸狩し侍りけるに，若きどちは獲物を貪り，先を争い，余は遙かに後れて，心静かに隈々探し求めけるに，菅の小笠ばかりなる松茸5本を得たり。あな目ざまし，如何に宇治大納言隆国の卿は平茸の怪しき沙汰は書い留め給いて，など松茸のめでたき事は洩し給いけるにや。

君見よや拾遺の茸の露5本”

これによつて松茸へと漫筆を進めねばならぬが，それに先つて今一つ平家物語を探つてみよう。

[平家物語] 今昔物語や宇治拾遺物語から大飛躍して平家物語を探つてみる。平家物語は誰れも熟知する戦記物語の傑作であり，国民的叙事文学の代表作とも称せられている。源平興亡の顚末を叙した 12 巻 (或は6巻，20 巻) もので，徒然草に後鳥羽院の時に信濃前司行長に作らせ，生仏という盲目法師に語らせたとあるので此の説が有力であると云われるが，異説紛々，作者として 14，5 人が候補にあがつて居ると云う。従つて出来た年代も不明であるが，大体後鳥羽院の院政の終り承久3年 (1221) よりは以前であろうとのことである。

かかる血なまぐさい戦の話であるためキノコを題材とする話の見つからぬことは当然といつてもよいだろう。ただ文中にキノコの名があるのが関の山であるけれど木曽義仲の猫間中納言対談中の “無塩のひらたけ” の話はちよつと面白い。多くの人々のよく知っている話であるがここに煩を顧みず載せてみよう。

木曽の左馬の頭義仲は平家の都落ちの跡，都の守護に当つた。色の白い美男であつたけれど2才から 30 以上になる迄木曽の山里に住んだため言語挙動は極めて粗野であつた。都で猫間中納言光高卿が用件のため

に来訪したので郎等共は「猫間殿が来られました」というと，義仲は笑つて「猫が人間に対面するのか」,郎等共が「これは猫でなく猫間の中納言と申す公卿で候」というので対面したところ「猫殿が見えたから馳走いたせ」という，中納言は「用件に参つたもの，左様の事は」と辞退したが，義仲は何物でも新しいものを無塩（ブエン，塩気がないのが本義）というと思つて「ここに無塩のヒラタケがある，早く早く」と田舎の合子（ゴウシ，蓋のある漆塗の大椀）に飯を山盛りにし，この茸汁をつけて出して，義仲はこれを食い，中納言はすすめられるのでやむを得ず箸を取り食うまねをしてやめたところ，義仲は大笑いして「猫殿は小食で，猫おろし（猫は小食にて食い残しする癖のあるを猫おろしという）し給うた，マアマア食べ給え」と催促するので中納言はあきれて用件も話さずに帰つてしまつたという。これはエチケットの問題で無遠慮の話であるが，キノコそのものの問題とは無縁のヒラタケである。

次に吾等に興味のあることは本書の冒頭にある全篇を通ずる作者の人生観ともみられる名文である。

祇園精舎の事

"祇園精舎の鐘の声，諸行無常の響きあり，沙羅雙樹の花の色，盛者必衰の理りをあらわす"。

これは有名な文であり誰れも知つて居るが，この解釈は容易でない。諸書を見て大体次のような解釈で甘んじて居つた。釈迦は難行苦業をかさねて悟りを開いたのは 35 才で，これから入門者が多くなつた。隣国憍薩羅の舎衛城にいつたとき富豪の須達多から祇園精舎（精舎は修道行者の居るところ，即ち寺のこと）の献納を受けて，それから後多くは此処に居つて生滅輪廻の無常の法を説き極めて隆々たるものであつた。かく教化すること 45 年 80 才に達した時，弟子の阿難をつれて只 2 人拘尸那掲羅に向つた途中，尸軟拏伐底河畔についた時苦しくてたまらず，路傍の沙羅雙樹（沙羅は夏冬，葉の凋ぼまぬ常緑木でサラは高遠とか堅固とかいう梵語でそれから出た名だという，またこの木が 2 本づつ 8 本雙生していたから雙樹というと）の下に入つて横臥し，苦痛の中にも道を説き，阿難に看護されつつ涅槃に入つた。それは 2 月 15 日の夜半であつて，その樹も皆枯れてしまつた。まことに盛者必滅のことわりを表わすと，平家滅亡の運命を物語つている。

ところが，昨 1957 年 6 月の Life 誌に R. Gordon Wasson 氏の "Seeking the Magic Mushroom" という面白い記事が発表になり，今関氏は本誌第 5 号に於て詳しく内容を紹介された。その原文に（p. 56）支那と日本では不死の神聖な茸の古い伝説に出遇い，印度では一学派によれば仏陀は彼れの最後の晩餐に茸を食つて立ちどころに涅槃に入つたという記事を見た。その前者は多分秦の始皇帝が徐福を遣して不老不死の霊薬を日本に求めさせたことを指して居るであろうが，釈迦がキノコの為めに涅槃に入つたということは全く知らなかつた。どうも日本では各家庭にバイブルは比較的広く拡まつて居るようだが釈迦の伝記の出版物などあるのか，ないのかも知らぬのが普通ではなかろうか。然し幸に釈迦は阿難をつれて吠舎離から北方，拘尸那掲羅に向つた途中鍛工純陀の献げた食物が最後の晩餐であつたということを探り得た。果してそれがキノコであつたのかどうか，果して釈迦はキノコ中毒で死んだのであろうか。2500 年位以前の話で判然としないのが当然であるかも知れんが，キノコ専門の人々には興味ある話題の一つであろう。（つずく）

主な抗生物質の解説

岡　見　吉　郎

Yoshiro OKAMI: Some informations on antibiotic substances

Actinomycin（A, B, C_1, C_2, C_3, D, X_1, X_2 の種類がある）生産：*Streptomyces antibioticus*, *Actinomyces chrysomallus*。性状：水に溶けにくく数種の有機溶剤にとける。作用：グラム陽性菌と，弱いが黴類に抗生作用がある。

Albomycin　生産：*Streptomyces subtropicus*。性状：鉄を含むポリペプチッド。作用：グラム陽性菌による疾患にソ連で使用されている。

Anisomycin　生産：*Streptomyces griseolus*。性状：一塩基性，$C_{14}H_{19}NO_{14}$，水と数種の有機溶剤にとける。作用：*Candida* 症また *Trichomonas*, Amoeb などの原虫疾患に有効。

Aureothricin（米国で構造の似た Thiolutin が発見されている）生産：*Streptomyces thioluteus*, *S.*

celluloflavus。性状：水にとけにくく，有機溶剤にとける。作用：グラム陽・陰性菌，かび類を阻止するが，毒性があるため水虫など皮膚疾患に用いられている。

Bacitracin (A, A′, B, C, D, E, F_1, F_2, F_3, G に分けられている) 生産：*Bacillus subtilis* Tracy (後に *B. licheniformis* の変種となる)。性状：ポリペプチッドで，酸・中性水にとける。作用：グラム陽性菌に作用し，軟膏として局所に用いられるほか，筋肉注射で陽性菌の疾患に用いられる。家畜の発育促進のため飼料に添加される。

Carbomycin 生産：*Streptomyces halstedii*, *S. hygroscopicus* 近似菌，*S. albireticuli*。性状：水に溶ける。作用：グラム陽性菌およびリッケッチヤ疾患に有効。

Carzinophilin (A, B がある。主成分は A) 生産：*Streptomyces kitasatoensis*。性状：C, H, N からなり，水に僅かにとける。作用：吉田肉腫細胞，エーリッヒ癌に作用する。

Chloramphenicol 生産：*Streptomyces venezuelae*, *S. omiyaensis*, 化学合成。性状：水にとける。作用：グラム陽・陰性菌およびリッケッチャに有効。

Chlortetracyclin (Aureomycin と呼ばれ，Tetracyclin に Cl がついたもの，Terramycin は Tetracyclin にOが入つたもの)。生産：*Streptomyces aureofaciens*。作用：グラム陽・陰性およびリッケッチヤ疾患に有効。動物発育促進剤，魚菜保存剤として利用される。

Colistin 生産：*Bacillus aerosporus* 近似菌。性状：塩基性ポリペプチッドで Polymyxin に似る。作用：グラム陽・陰性菌に有効で，静脈注射の毒性はあるが，軟膏，経口投与のほかに筋肉注射として主としてグラム陰性菌による疾病に用いられる。

Erythromycin 生産：*Streptomyces erythreus*。性状：水にとける。作用：グラム陽性菌およびリッケッチヤ疾患に用いる。

Fradiomycin (別個に発見された梅沢らの Streptothricin B と Waksman の Neomycin に与えられた名前で，A, B, C がある。Neomycin A は Neamine ともよばれる)。生産：*Streptomyces fradiae*。性状：水にとけやすいが，有機溶剤にとけにくい。作用：グラム陽・陰性菌に作用するが，人体に注射したとき聴神経障害が強いので，軟膏として局所に，また腸内疾患に経口的に用いられる。

Fumagillin 生産：*Aspergillus fumigatus*。性状：水にとけにくい。作用：アメーバ，葡萄状球菌のファージを阻止する。赤痢アメーバ症の治療に使用されている。

Gramicidin 生産：*Bacillus brevis* (同時に Tyrocidin を作る)。性状：ポリペプチッド。作用：グラム陽性菌に作用するが，注射では毒性があるので，軟膏として局所に用いられる。

Leucomycin 生産：*Streptomyces kitasatoensis*。性状：Erythromycin, Carbomycin に似て交叉耐性がある。作用：グラム陽性菌，リッケッチヤ疾患に使用する。

Nystatin 生産：*Streptomyces noursei*。性状：水にとけにくい。作用：抗かび剤として用いられている。

Oleandomycin 生産：*Streptomyces antibioticus*。性状：水にとける。Erythromycin, Carbomycin と交叉耐性を示す。作用：グラム陽性菌とリッケッチャを阻止する。

Oxamycin (Cycloserine, Orientmycin) 生産：*Streptomyces garyphalus*, *S. orchidaceus*, *S. lavendulae* 類似菌，*S. roseochromogenus*。性状：D-4-Amino-isoxazolidone。作用：細菌に弱い抗菌作用をもち，Streptomycin と相乗的に作用する。マウスの動物実験では結核に作用しなかつたが，臨床的には結核に有効であつた。そのほか，Donovanosis, ヘルペス尿路感染に有効。

Oxytetracyclin (Terramycin) 生産：*Streptomyces rimosus*。性状：水にとける。作用：グラム陽・陰性，リッケッチヤなどの広範囲の微生物に作用し，百日咳，疫痢，肺炎，リッケッチヤ症の治療に用いられる。

Penicillin 生産：*Penicillium chrysogenum*。性状：水にとける。G, K, F, X など各種の Penicillin が生合成される。作用：グラム陽性菌疾患および第四性病そのほかの治療に使用される。

Polymyxin (Aerosporin, Bacillosporin) 生産：*Bacillus polymyxa*, *B. aerosporus*。性状：ポリペプチッドで，アミノ酸の配列により A, B, C, D, E の5種がある。作用：主としてグラム陽性菌に作用し，軟膏として局所的に使用される。

Sarkomycin 生産：*Streptomyces erythrochromogenes* 類似菌。性状：水にとける。作用：動物の吉田肉腫細胞，エーリッヒ癌細胞の分裂増殖を阻止する。静脈注射で人体悪性腫瘍の治療に用いられている。

Streptomycin 生産：*Streptomyces griseus*。性状：水にとける。作用：グラム陽・陰性特に結核菌にも有効で，治療剤として用いられている。

Tetracyclin 生産: Chlortetracyclin (Aureomycin), Oxytetracyclin (Terramycin) の骨格となるもので，上記二者から化学的に還元されてつくられ，また直接培養によつてもつくられる。性状: 上記二者の項参照。作用: 上記二者と同じく，グラム陽・陰性菌およびリッケッチヤ等広い抗菌スペクトラムを示すが，安定性は他二者よりも高い。

Thiolutin 生産: *Streptomyces albus*。性状: 水にとけないが，アセトンなどの有機溶剤にとける。作用: グラム陽性菌およびカビ，原虫に作用するが，毒性が強いので軟膏として局所的に用いられる。

Trichomycin 生産: *Streptomyces hachijoensis*。性状: 弱アルカリで水に溶ける。黄色粉末で Heptene 化合物である。作用: トリコモナス，かびに有効。皮下，経口投与では比較的毒性が少いため，腟坐薬，軟膏として局所および内服としてトリコモナス症，カンジダ，水虫症に用いられている。農薬としても使用が考慮されている。

Viomycin 生産: *Streptomyces puniceus*, *S. floridae*, *S. griseus* の一変種。性状: 水にとけ有機溶剤にとけにくい。作用: グラム陽・陰性菌および結核菌に有効。毒性があるが，Streptomycin 耐性菌に有効なので，耐性菌の感染治療に用いられている。

—国立予防衛生研究所—

オオワライタケによる中毒

本　山　久　平

Kyūhei, MOTOYAMA: A poisoned case by *Gymnopilus spectabilis*

中毒者: 新潟県東頸城郡安塚町大字小谷島，水沢清蔵 (49 歳)，ヤノ (47)，勝也 (18)，美津 (17)，利雄 (14)。

時: 1957, IX－16，採食，発病。

症状: 夕食後5分間ぐらいたつて，長男が発病，他はまだ食卓にむかう。直ちに視力が犯され，すべてが赤く見える。障子の骨，その他直立するものはすべて動き，蛇のようなものが多数上昇するように見えた。また女子の中毒者は耳に異様な音楽をきき胸さわぎがした。

直ちに医師を招き手当をうけ，翌日は回復した。中毒者 (47 歳) は意識を失つてたおれたが，医師の注射で回復した。

この中毒者は精神の異常興奮を認められるが笑い興ずる様子はなかつた。

郡内主として保倉川流域にはこのキノコによる中毒は珍らしくない。多くは視力が犯され，幻覚・幻聴をきたすようである。あるいは怒り，あるいは笑い，その間他を認めないようである (実験者談)。また蛇のようなものが見えたという人が多い。

キノコの発生はスギの切株に多い。筆者は附近の杉の切株，山林及び宅内の比較的日当りのよい場所で，4カ所から採集した。注意すればなお多数採集することができるであろう。　(1958, II)

学　会　記　事

日本菌学会第1回関西談話会　昭和 33 年2月1日京都市東山，楽友会館で

京都大学農学部の浜田稔氏があつせんの労をとられて，去る2月1日菌学会の関西における談話会が誕生した。事前に菌学会の本部に連絡があつたので，小林義雄及び印東両幹事が，同談話会の発足を慶祝する意味で出席した。

この日，晴天で日ざし暖かくのどかな京の土曜日の午後は，冬のなごりの寒さを全く忘れるほどであつた。参会者は 40 名 (名簿後掲) に及び，浜田稔氏の御挨拶をかねての開会の辞にはじまり，次の講演が行なわれた。

赤井重恭氏: 中国における植物病理学

同氏の中国旅行談で植物病理学の立場から視察された中国病理学・菌学界の動向を詳細説明された。植物保護・増産というような応用の見地からこの方面の発展を希望している点，かって日本に留学し，アメリカに留学した学者が中枢をなしている点，イネの研究などは日本のイネの育種と関係深い点など，近い将来にわれわれの学界も中国のこの方面の発展に関係浅からざる状態であるような内容のお話が多かった。

印東弘玄: 二三の土壌生の Phycomycetes

本邦で未だ深く知られていない Phycomycetes 中 *Coemansis* を多数分離観察したので，その採集法と

実物の供覧をした。また同じく Phycomycetes に入れられている *Endogone* は正式の記録はなかつたが，先年小林義雄氏が自分達と菅平の湿原で採集をされたとき，ミズゴケ上に発見されたものと最近 R. P. Korf 氏が日光の菖蒲ケ浜の土壌中の腐朽した樹枝についているものを発見されたものと共にその標本をいただいてあるのでこれの御紹介をした。

小林義雄氏： メキシコ産の菌類について

同氏が Wasson 氏及び R. Heim 氏の業蹟を中心にして，興味ある ethnomycology（民族菌学）ともいうべき見地から，メキシコの菌類について話された。特に R. Heim, Wasson 両氏がメキシコで行われている奇習，*Psilocybe mexicana* その他の毒菌を食べてエクスタシーにはいり幽明境を異にする人や，神と話をする祈禱師の実状を調査したことなど，R. Heim 氏の記録して来たテープコーダーによつて説明された。

広江勇氏： ナメコの学名について

ナメコと称せられる菌類は1種でない。また学名も人により *Collybia Nameko, Pholiota Nameko, Collybia velutipes, Pholiota mutabilis, Pholiota adiposa* 等のものがいろいろに用いられている。エノキタケ・ナメスギタケ及びヌメリスギタケに分けて検討すべきである。

なお，出席者全員の自己紹介あり，それぞれ新談話会についての抱負や希望を述べられた。出席者の名簿は次の通り。（敬称略）

中西進，坂野勲，遠山明，岸本潤，桂琦一，近藤章，山本和太郎，紺谷修治，平田一士，本郷次雄，西尾惣次郎，西尾時一，広江勇，小寺九五郎，中沢亮治，赤穂重雄，森本肇，吉見一子，箕浦久兵衛，岡崎義一，黒田彰夫，赤井重恭，永友勇，浜田稔，獅山慈孝，本永友彦，田中寛康，小倉寛典，岩本良次郎，浦山隆司，萩本宏，加藤肇，守中正，甲元啓介，吉永英一，土倉亮一，大内成志，赤木正志，小林義雄，印東弘玄

会は一応5時すぎに閉会したが，別室にて有志の会食を行ないその後小林義雄氏持参のカラースライドの供覧をし，歓談尽くるところを知らなかつたが，9時に散会した。（印東弘玄記）

広島菌類談話会

この会は昭和31年秋に発足してから9回を重ねた。メンバーは広島市内在住の菌学関係の諸氏であるが，広島県内，および近県の同好者にも呼びかける予定である。

第1回（'56, XI, 10） 長西広輔氏（広島女学院大学）の酵母菌の分類を中心とした話，林克己氏（広島大学理学部，植物）の N^{15} を用いての Hydrogenomonas の代謝研究の話があつた。当日の出席者 11 名

第2回（'59, XII, 13） 大槻虎男氏（お茶の水女子大）を迎えて，好稠菌の防圧，古美術品の殺菌などについて，意見の交換があつた。出席者 10 名

第3回（'57, I, 26） 米山穰氏（広島大学皆実分校）の「酵母の natural habitat について」の話があつた。出席者 11 名

第4回（'57, IV, 3） 能美良作氏（広島大学工学部醱酵）は豊富なスライドによつて放線菌の分類についての新知見の披露があつた。出席者7名

第5回（'57, VI, 14） 岡智氏（広島県食品工業試験場）の「食品防腐について」の話を中心に意見の交換があつた。出席者8名

第6回（'57, IX, 28） 川上襄氏（広島大学工学部醱酵）は電子顕微鏡による酵母菌胞子超薄切片の観察をスライドにより紹介して，胞子の形状による分類の可能性を提示した。出席者6名

第7回（'57, XI, 29） 根平武雄氏（広島大学工学部，醱酵）は「麹菌の分類」について総説を試みた。出席者 10 名

第8回（'58, IV, 5） 長西広輔氏の満鉄時代の懐古談を興味深く傾聴した。出席者9名

第9回（'58, V, 17） 小林義雄氏（国立科学博物館）を迎えて，最近の菌学界の諸問題についての広汎な意見の交換があり，特にこの日の講演者，能美良作氏の「放線菌の新分類」の提案については活潑な意見が闘わされた。出席者 16 名

なおこの会に毎回出席の常連は次の諸氏である。

長西広輔，米山穰，岡 智，能美良作，川上襄，根平武雄

菌類研究の同好の士の参加を希望している。

（1958, V, 20 根平）

編集者 今関六也
東京都目黒区下目黒4の770 林業試験場
印刷所 笠井出版印刷社
東京都港区芝南佐久間町1ノ53
TEL. (50) 1421～1424